

空中の書

紙田 彰



窓から覗くと
沐浴する異国の女のような
幽霊だった

肉体の運命

死者の肉を
刺身にして弔う風習を知ったのは
露地裏で少女と遊んでいたころだ

満月

夜は来た 妖しい吐息が裾野に広がってゆく 頭上に爛々とかがやく紅蓮の月 おお不吉な満月
よ 腔腸動物のように毒液を撒きながら人民を失神させる

贖罪

古来、夜の使者と馴染み、悪虐非道の律法を糧とし、巻貝の好餌として封印された王国の名 あ
あ恋という魔の温床
——おれは幼友達が夢に現れ出、細長い蛇に転身してまわりつくのを知っている そのとき体
が浮游し、最愛の妻の乳房に手を伸して許しを乞うのだ
祝祭の日が来た
礼砲が鳴る

声の届かぬ部屋Ⅰ

魂と肉体を分つ術を用い
害まがひの中で修煉する

静止しているものに

命を吹き込み

禁断の音楽に耳をすます

数億の眼と失笑

涸いた岩肌をたどり

亀裂の中に這入り込む

見えざるものが見え

暗い危険へと下降する

知りうべきはいま

風に揺られて

死の床のぬくもりを

声の届かぬ部屋Ⅱ

頭蓋骨にしまった

罌粟マクシのうすい花びら

インクのかすれた紙幣

怪しげな深夜の誘惑

約束の地への招待状
ひとたびまばたきすると
黄金の都市
ふたたびまばたきすると
悪相の神々
手を触れたときには
光の箭が
夢をつらぬいている

声の届かぬ部屋Ⅲ

青鹿毛の馬の背に
咒文の書かれた服を着て
闇に溶ける者がいる
しだいに数が増すかと思うと
一箇の鏡であつたりする
肘に疼痛をおぼえ
こうして肖像を描いているが
いまだ精神の愛撫
めまぐるしい確率論
黒革の手帖に
新たなる神の名が加えられ

不浄の匂いが広がっている

教字という名の首

声の届かぬ部屋で

包みを開封すると

押花の罌粟と

頭蓋骨の破片とが

雪のように

部屋を蔽った

宇宙モデルとして

愛していたおまえのかけら

不思議な匂いを醸す

透明な和紙

いまや 便りを告ぐるべき夜

夜を忘るべき睡りの中で

壁をへだてて

硯をする音が

鼓膜につたう

透明な卵

球体の中に世界が視える
老いた書誌学者の説によれば
つがいの巨人族の
幾何級数的な交接
青みがかつた眼の彼方
降る星も消えずに

壁の中に埋る耳
通廊に貼られた聲音
樹齡一千年の黒檀製テーブル
タップダンスを踊る
女の細いかかどが
鈍に削られたように
ガラスの部屋に喰い入る

戦争の夢を語る少女
やわらかな唇の奥
硬質の乳
なによりも尖つた腎
体内における血の嵐

殺人者の盟

烟る海へと潜ぎ出してゆく

龍の刺青を誇る腕

数億の日々が

数億の波の棘を渡ってゆく

いま

階段の下に

ゆらめく卵が

夜の神秘を映す

白髪の友の声音ひくく

ひらたく伸びた掌に

滴となつて

燃え落ちる

頭蓋骨モデルから伝わるもの

闇の傾斜を、張りつめた糸が重なるように、かさかさに潤びた雪片が滑ってゆくのを聞いた。カ
ーテンの蔭の隙間から冷たい風が忍び込むせいでもあったのだろう。骨が噛みつかれるように深
い冷たさが肉を包んでいる。それにつれて体が底なしの睡りに就いてはいたのだが、脳味噌は奇
妙にうごめきはじめ澄潮としていた。肉が落けて出して床に吸われてでもいるのだろうか。

姿勢だけは謹直なものであった。背筋はきりりと伸ばし、直角に曲げて揃えた両脚の上、ちょうど臍のあたりで呪印さえ結んでいた。臉を開けようとしたが、固く結ばれたままいかようにも開けることができない。だが何かしら周囲のものがありようが、そのままの状態でも感じられた。特に強く捉えられるのは、机上に埃にまみれたまま放置されている頭蓋骨のモデルの形である。温かなものと冷たいものから発せられる微妙な空気の運動などといったものではない。確かな触覚を伴った明瞭な形である。

数年前に知人から罌粟の一種を押花にしたものを贈られ、それをモデルの中に蔵っていたことを思い出していた。その薄い花びらの透き通ったピンク色が記憶の底から泛んでくる。モデルの中にはもう一つのがらくたが匿されていた。それはジルコンを象嵌した、銀製の、人面をかたどった大きな指環である。異国の骨董屋で買い求めたのだが、女主人の言によるとコメディアンのマスクとのことである。けれども髻を耳まで開いたその顔は俗悪で、いささか呪われたものであるかのような畏れを伴っていた。その相貌の面妖さが明瞭に頭の中に感じられる。見えるものは何ひとつないのにすべてが感じられる。奇怪なる至福とでもいえそうな一刻である。骨格だけを残して、肉体と呼ばれうるあらかたが失われてゆく。まるで聖遺物器の重なりのように……

古い砂

砂上の戯に数十億の蜜蜂が群っている。独り涸いた丘陵を駈けたのは瞬時の眩惑であったのだろうか。はじめのうちは黴い眼窩の底から徐々に湧き上がる妖気に怖気づいていたが、輪郭の透명한曲線が肉の色を帯びていくのを知ってからは、魂のこがれるような戦慄にいつしかうちふるえていた。鼻梁の欠落した首ははにかむような微笑を漏している。爪の間に入り込む砂粒の多くは

硝子質の光沢をもっていたが、掘り進むうちに塩のように重い物質に変じてゆく。子供のころに海岸で犬の白骨をみつけた記憶が掠める。たしかに爆竹を鳴らしながら走り廻った当時には、何もかもが神秘で優しかった。蜜蜂は管を伸して塩の谷間を埋めつくしている。匣の中にモザイクの縫い取りをした布がたたみ込まれていた。紫の地に黄と白の糸で縁取りし、中央にかすかな王家の紋章が刺繍されている。その首は犬のものではなかった。前頭葉の巨大さを物語る額の広さが不吉な印象をもたらしている。砂に同化せずに過ごした、考えることのできぬ永遠の時よ。砂漠の齡を超えた空想の古代よ。ある田園詩人はその奇蹟を書きとどめる術はないと断言する、解明できない自然は言葉の矩を越えているからと。いま机上に鎮座するその首は遠い謎を語っている、精神の奥深さというよりも原始の底から慰安をもたらすもののごとくいまその首は流れるような声で語りかけてくる。もはや寸秒の夢。夢に果くう夜。そして彼方から押し寄せる危険。王家とは生成そのもの、破滅そのものの源をなす邪悪な波頭。蜜蜂の一匹を指でつぶしてみると黄金の砂よりも硬く冷たい液体がこぼれでる。骨の粉が崩れおちずに光っているのだ。睡りに就くことは禁じられている。死の床は星々の距離で測ることはできない、死の床は、死の床は……妹の寝台にあふれた胃液が妹の影のように貼りついていて、二十数年を経て話してみると、当時と変わりのない喋り方で、抱いてくれとせがまれる。いま十数世紀を経ようとも、抱いて離さぬ夜は暮れない。重たい塩の地の果てよ。涙の中に原始の塩もあり儂い古代の水もある。死の床につづく愛すべき首よ。罌粟の花びらに満たされてあれ、永劫の期待を蔽うために

道

夕暮どきともなると、樹々のざわめきの奥に見え隠れする獣の対になつた姿をみとめることもあ
る。

館まで小一時間ほどの細い道を、そんな獣たちの挙動を盗み見しながら登りつめてゆくと、さほど高くない丘の頂が手の届くような近さにあると思われて、つい手を伸ばして、届かぬ肉体の限界と飛びゆけぬ精神の力の足りなさに歯がゆい心持が生じ、軽やかな足どりの障碍とさえなる人には住むべき処と見うべき性質の夢など、歴然として何も無いのだということに立腹してみても、さしたる問題にもなろうとは思われぬが、かといって、翼が生えて蒼穹にはばたこうなどとは考えてみた試しすらない。

古代、青い、あまりにも深い碧の内海で水底に舞い落ちた慢心の少年がいたという話は有名だが、そのような慢心のありようもわからぬではない。

獣道のような、わが脊風が拓いたこの道を淡々とした思いで進んでいると、いつしかこの道の絶ゆる先は弓のように反り返って、ちょうどスキージャンプのように、限りのない大空の彼方になつてゆくのではないかという妄想に捉われるのだが、心の奥底では、あながちそれが幼児的な空想でもないのでは、という一種不吉な病が頭を搔げはじめた。

唇の赤い少女

睡りの前に少女のかかともを見る　ガラスのように尖った神秘が眼の中を疾る　ほそい骨とアンズリウム、夢を充たす妖しい香り　階段は世界の貌　風とともに日々を駆ける　えたいの知れない白い影が背中を敲う　喉が喝く　手を伸ばして冷たい水を啜る　ビールは明方のためにとつておこ　烟草が沁る　隣には裸の女が眠っているので音楽は流せない　あなたのために父の通夜を準備するわ、死者の肉を刺身にすると魂は永劫不滅よ　扉を敲く音は精神に悪い　掌は手首のために造られ、指は心臓を握むためにある　電車の中で黄色のブラウスを着た娘を眺め、返された視線に頭がかすむ　西瓜の種が絨緞に埋っている　鳩尾の疼き、力のない咳　ほそい露地で自殺し

た男の密葬が行われる。夏らしくもない長い雨、一人三合と書かれた貼紙を見ては独酌の手もふるえる。あたたかな女兒の膝に触れて見上げると、童女は死体を刺身にしている。澄んだ瞳と真赤な唇の童女の首はない。羽蟻が湧き出し建物の水蜜桃のように朽ちてゆく。夜明の晩、後ろの正面、童女の群が不吉な輪を作る。教室で食事をしている子供らの前で、禿頭の男がコッペパンを御幣にして神妙に坐っている。扇風機から洩れる古い風、呼吸をおびやかす風。絨緞に埋った骨はみつからない。戸棚から銅貨を盗み出した少年は翌日まで帰らない。化石を採りに山へ登ると強姦現場に達していた。ハンカチーフには血のしみがつき、後ろに置かれた少女の指先には涙。睡魔とともに雨が降る。軒下の下着が盗まれる。少女の膝は成長にしたがい冷えてゆく。地下鉄のホームで会ったときには疲労の色が濃い。緋色の衣裳が翻る。顕微鏡を覗くと、尻尾のある無数の悪魔が蠢いている。教師は少女を集めて秘密の講義をする。数日後、辞令が出て僻村に廻塞する。色の黒い女生徒が後をつける。ほそい脚には投げやりな愛、シャツを破ってからは二度と出会わない。漁港で身を持ち崩しているに違いない。肌色の鳥が四肢を広げて夢の空を翔けてゆく。醜くもあり美しくもあり、眼の中はいびつに。

魂の滋養

受話器から洩れる魂の誘惑。あくことない耽溺。室内の細い光が街路へ抜ける。電灯の軋みを合図に地図に記されていない町まで疾る。到着したのは約束の刻限を大幅に超過してからである。暦の下で困惑する少女よ。廻転扉から歴史は始まる。青い絨（オックス）。アルミニウムの鏡板（ミラー）。古色蒼然とした円舞曲。腕の交叉は下半身にて破られる。折れ曲った肢体から尿のように噴き出る夢。魔物の影が深う。長い鎖を静かにインク壺に漬け夜啼きの鳥を描く。闇はいっそう深まりついに凝固する。仕掛けのある空箱に棲む花嫁。鯛の恋人よ。純白の下着が義歯とともに外される。瞑想な

ど不要だ 暗々とした珠玉が爪が言葉が黒々と伸長している 南の島の砂浜では五色の慾望が
險の下では蠟燭が 天井から風がそよぐ 星々の移動が突発的な予定調和をしでかす いびつな
乳房 二つに割れる乳暈 鋭い腰 沈み込むような尻 深く愛すると肉体は泥になる 頭脳も鬱
血する 髪の毛に毒虫が貼りつき赤い舌を覗かせて冷笑 季節が外れると関節に痛みが疾る 押
し寄せる齡とは一条の螺旋であろうか 背中から尾へと向う刃物 魚の臓物に南十字の吐息が匿
され旋毛風が舞う 水道路の遺跡から登場する生物は両足を揃えて跳躍しながら磁気を食す 星
間物質は倉庫で運搬している おお鏡の中で燃えつきる踊り子よ 挨拶を交わす さすがに疲労
は隠せない 面影のうちに種属もなく調理人の熱いまなざしもなくただ往き來する書物の記名が
なびいている たとえば硝子張りの字引とか棲処を失った羽虫 溝の消えたレコード かすかな
思い違いから鍵を紛失する ひからびたしがらみに映じる幼児の幻惑 祭の爆竹がはせる 走馬
灯に初寝の影が添えられる 地震の起ったときに寄宿舎の屋上から海の彼方の炎を見る 洗濯物
は竿に吊られて濡れている 電信柱には骨盤 嫌な顔をするな 鉄拳が飛ぶぞ 裏通りに首の
ない変死体 壁の中には数奇の運命を終えた老婆 館には魍魎の出没の儀 夜は更ける いやま
して鈍爛の夜 数軒の呑屋を経ても薔薇の花束はしおれない 睡魔の中で次々に裸にされる少女
低温で茹られる黄身 女どもが真つ先に弑される 恋人を下水管に流した男が強力な下剤を服用
受皿に果実の種が落とされる 体を引き緊め酒をあおる 夜風が実に快適だ 遠心力の効用とは
客船を見事に沈没させる点にある 緩慢な波を分けて蒸気機関車が青白い烟を吐く 海底に向つ
て老衰する 古代語は白蟻によく馴染んでいる とともに魂の滋養だ 筋肉から弾き出て素敵に印
象的な紅蓮の布となる めくるめく即興曲 幻妖なる画布 不思議の国の扉 不眠症の決り文句
だ 柱時計が酸化する 火傷を何度も負う 夜が明けても空は暗い 羽を借用して雨の朝を渡る
うか 空白の敷衍とともに